「全学共通教育」のひろば

No.9 特集号

Un roseau

総合教育科目ガイドブック

大学で何を学ぶか、どう学ぶか
法学部 野 田 昌 吾

混乱の未来を背負う皆さんへ
理学部 惣 川 まりな

フェスティナ・レンテ
文学部 丹 下 和 彦

大阪市立大学3号館前広場

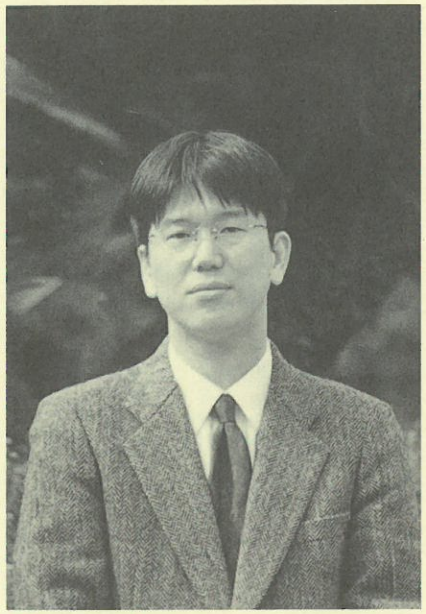
2000年3月

編集・発行 大阪市立大学教務委員会

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
TEL (06)6605-2935

大学で何を学ぶか、どう学ぶか

法学部　野田昌吾



新入生そして上回生の皆さん。おそらく皆さんは志望していた学部にさまざまな希望や期待をもって大学に入ってきたことと思います。友達をたくさんつくりたい、クラブ・サークル活動をやりたい、自由な時間ができるといったことや入試科目の種類なども理由としてもちろん小さくないとは思いますが、こんな勉強がしてみたい、こんな科目が面白そう、こんな分野を勉強して将来こんな職業に就きたいというのが、大学や学部を選択するさいの皆さんのなかでの大きな理由だったはずです。新入生の皆さんは、入学式が終わり、ガイダンスがすんで、いよいよその希望の分野の勉強に邁進できる、そうしたいと思っているに違いありません。しかし、多くの日本の大学と同じように、大阪市立大学では必ずしもそういうわけにはいきません。この大学で皆さんが卒業までに学ぶ必要があるのは、皆さんが入った学部が行っている専門科目だけではありません。このほかに「全学共通科目」と呼ばれる科目の授業に出て、試験に合格する必要があります。

ほとんどすべての学部では、1回生のあいだは主としてこの「全学共通科目」と呼ばれる科目の授業を取るかたちに事実上なっています。ですから希望の分野の科目の授業に入り浸ろうという希望はかなえられないことになります。「全学共通科目」には英語やその

タイトル“Un roseau（アン　ロゾ）”
―フランス語：一本の葦―について

B. Pascal（1623-1662）は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。しかし、Pascalは言うのです。

L'homme est un roseau pensant.
（ロム　エタン　ロゾーパンサン）

―人間は考える一本の葦である―

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、考える（思考する、思想する）という行為によって、有形の現象の世界（形而下の世界）のみならず、その奥にある広い広い世界（形而上の世界）を知ることができる存在なのだと。

Un roseauとは「あなた」のことなのです。

ほかの外国語の科目、健康・スポーツ科学科目などのほか、文学、社会学、心理学、歴史、政治・経済、法学、生物学、物理学、化学、地学、数学などさまざまな分野に関わる「総合教育科目」と呼ばれる科目があります。

当然このようにひじょうにさまざまな分野の科目が提供されていますから、皆さんが大学で学ぼうと思っていたまさにその分野の科目もあるでしょうし、それと密接に関わる分野の科目もあるでしょう。とはいっても皆さんからすれば専門的な勉強がしたかったのにどうしてこんな一般的な科目、あるいは場合によっては全然興味のない科目の授業を受けないとならないんだときっと不満に思うことでしょう。実際、これについては多くの不満が日常的に出ているのが現状です。

「全学共通科目」、とりわけ「総合教育科目」は〝パンキョウ〟と呼ばれ「なんで〝パンキョウ〟を取らんとあかんのや」などと言われます。〝パンキョウ〟とはもともと「一般教養科目」を略した言葉でした。わたしが大学生だった頃――そんなに昔ではありません。15年ほど前のことです――、大学に入るとまずわたしたちは「教養課程」を修めるものとされていました。これは、現在の全学共通科目同様に、語学、健康・スポーツ科学科目に加えてまさに文字どおりの〝パンキョウ〟＝一般教養科目（正確には「一般教育科目」）から成り立っています。

その頃は全国の大学どこでも同じように、この一般教育科目の必要修得単位数が決められていて、さらにこの〝パンキョウ〟が「人文」「社会」「自然」の3分野に分けられ、そのそれぞれを何単位ずつ取らねばならないかも全国一律に決められていました。どこの大学、どの学部に入学したかにかかわらず、一律に同じ「教養課程」の履修が定められていたのです。入学後まず2年間はもっぱら教養科目を履修し、そして語学を全部履修してはじめて「専門課程」へ「上がる」というのが当時のカリキュラムの基本的な枠組でした。当然わたしが大学生の頃も今と同じような不満の声が学生

から上がっていました。「なんで〝キョーヨー〟（注・当時はわたしたちはパンキョウとは言いませんでした）をとる必要があるんや」とか「はやく専門の勉強がしたい」とかいう例のあれです。でも、1・2回生＝教養、3・4回生＝専門という全国一律の厳然たる枠組が制度的にあったせいか、こうした不満は不満以上にはならず、全体としては皆この枠組をしぶしぶかもしれませんが受け入れていたように思います。

しかし今はそうはいきません。文部省による大学に対する規制は緩やかになり、自由化されました。それに伴い大阪市立大学でも専門と教養の制度的な仕切りを取っ払い、旧教養課程は「全学共通教育」として四年一貫で学生に提供される科目として位置づけ直され、〝パンキョウ〟は「総合教育科目」として一新されました。必要単位数も大学・学部で定めることになりました。こうなると各大学・各学部は、どうして今こういう制度になっているのか、ほかのやり方ではどうしてだめなのかを自らの考えと言葉で説明しなければならないことになります。この間ずっと「なんでパンキョウをとる必要があるんや」という不満や批判が出続けているという事実は、大学および各学部のこの制度に対する説明が皆さんに通じていない、あるいは納得を与えていないからでもあると言えます。ではどうして〝パンキョウ〟を取る必要があるのでしょうか。大学や各学部にはそれぞれこの問題についての基本的な考え方がありますが、ここではそのような〝公式の〟説明ではなく、この問題に関するわたし個人の体験と考えをお話しようと思います。

話を再びわたしの学生時代に戻します。わたしは大学に入ってまず〝キョーヨー〟を受けました。2回生までにたしか心理学、西洋史、美術史、政治学、法学、地学、生物学を受講しました。このほか、市大ならではのいわゆる「問題論」の授業、部落問題論と障害者

問題論も取りました。そのほとんどがわたしにとって興味の持てる授業であったように記憶しています。以下はわたしの”キョーヨー“体験です。

まずそこで感じたのは大学に入ったという実感でした。教科書はあったりなかったりまちまちでしたが、教科書といっても高校までのようなものではありません。新書もありましたが、多くはハードカバーでなかには箱入りのもありました。当然いわゆる学術書です。今から思うと学術書とは言っても、はじめから教科書として作られたものも多く、過剰な思い入れもあったのかもしれませんが、ともかく、研究書を教科書に学者である教員がそれぞれの分野の入口へと誘ってくれることに大学生の実感をもったのです。覚えなさい、練習問題を解きなさいといったものではない授業は新鮮でした。板書があまりなく、教員が語る言葉に耳を傾けつつ、要点や気に入ったフレーズなどを自我流にノートし、満足感を覚えました。当時としても古臭いタイプの学生だったのかもしれません。学年末に試験があります。漠然と面白かったという感想は残っていても、講義の内容をはっきりと覚えているわけではもちろんありません。ノートを見返しても、何が書いてあるかわからない。自分のノート・テイクが自己満足であったことを思い知らされるわけです。わたしは、教科書があればその教科書を、教科書を使わない授業の場合は図書館や書店へ行き、関係がありそうな本を手に入れ、試験日程と睨みっこして無理矢理それらを読んで試験に臨みました。学術書を読み通す最初のきっかけでした。

ともあれ、わたしにとって大学での勉強の仕方の手ほどきを受けたのが”キョーヨー“だったのです。

でも、こうした勉強のやり方は別に一般教養科目でないと身につかないものではもちろんありません。専門科目の授業でも身につけることができるでしょう。しかし、教養科目の受講はわたしにとってそれ以上の経験でした。さきに挙げたように、わたしは教養課程において一応の関心からいくつかの科目を受講しました。そのなかにはわたしが選んだ学部の専門と同じ法学や政治学の科目もありましたが、それ以外はわたしが直接専門的に勉強しようと思っているのとは違う分野の科目でした。たしかにストレートに自分が勉強したいと思っている科目の授業を受けたいという気持ちもありました。その点でやはり専門科目に比べ一般教養科目に対する動機づけが弱かったのは事実です。しかし話を聞いてみると案外面白いのです。あまり関心がわかないなと思っていた科目が実は自分の関心を大きく刺激するものであったりしたのです。自分の興味からするとこれだと思った科目がそうでなかったというその逆の例もあります。たまたまその授業で扱った問題がわたしにヒットした（あるいはしなかった）だけかもしれませんし、おそらく先生と自分との相性もあったでしょう。しかし、専門科目を学ぶ前にそれとは異なる分野の科目を受講することによって、自分の新たな関心を発見したり、これまで関心があると思っていた分野が実は自分の本当の関心とはズレている（可能性がある）ことに気づいたりしたことは大きな収穫でした。

当然、自分のもとからの関心を再確認するいい機会にもなりました。よく考えてみると、まだ学んだこともない学問分野に本当の意味で関心があるかどうかは実は怪しいものです。その関心なり興味はそれほどたいした基盤のうえに立っていないかもしれません。ささいなことが物事を成し遂げる大きなきっかけになるのも事実ですが、自分自身を反省してみることも重要でしょう。”キョーヨー“は、当時のわたしにとって、それが専門科目ではないという気安さも手伝って、肩の力の抜けた状態でなかば素直に自分の興味・関心にしたがって受講できるものでした。それがまた自分の関心を見定めるうえでも大きな意味をもったのです。今から思うと、”キョーヨー“体験により、わたしは自分の関心について距離を置いて眺めること、いわゆる自己の対象化と相対化の意義を学んだと言えるかもしれません。ともあれ教養科目の受講がわたしの世界

を広げてくれたことは間違いありません。

”キョーヨー“によって自己の関心の対象化と相対化が可能になったと言いました。わたしは、この対象化と相対化、またそれとも関わってくる多様性の存在の認識こそ大学で学ぶことの中身ではないかと常々考えています。大学とは専門的な学問を修めるところではないかという反論がこれにはただちに返ってくるでしょう。たしかにそれも間違いではありません。でも4年間に専門的な学問を学ぶ意味はどこにあるのでしょうか。専門的な知識を修得し、社会生活・職業生活に活かすためでしょうか。しかし、一部の分野を除いて、大学で学んだ学科の知識が直接社会に出て役に立つわけではありませんし、仮に役立ったとしてもこれらの知識は現在の変化の激しい社会ではすぐに時代遅れになってしまうかもしれません。現在の学問の最先端を学んだとしても、すぐにそれは陳腐化してしまう可能性があります。でもだからといって大学で学ぶ意味を端から否定する人はほとんどいないでしょう。社会での実用性だけを強調すれば、専門学校や各種の教室でもいいことになってしまいます。でもそうは言いません。なぜでしょうか。大学には大学の役割があることが暗黙にでも承認されているということではないでしょうか。大学人の一人としてわたしはそう信じています。

大学教育の役割は学問的な訓練です。しかし、それは単なる知識の修得ではありません。学問の方法や姿勢の修得を含めたものです。

ここで言う方法とは、学問が対象に迫るうえでの姿勢のことです。ある対象の性格を知るには、それをいろいろな思い込みや偏見からできるだけ自由に眺めてみる必要があります。そのためには自分自身が現在立っている位置も含めて反省的に考える必要があります。周りの世界についてもよく考えてみる必要があるでしょう。また、いったん打ち立てた自分の考えがどれほど対象をより客観的に観察しているか、ほかの人と議論することによって確かめ、場合によってはその考えを修正する用意もいるでしょう。これはさっきお話した対象化と相対化そのものです。大学は学問を通じてこうした態度を身につける場でもあるのです。これが「教養」です。

総合教育科目は皆さんがこうした教養を身につけることを大きな目的にしているものだと思います。視野・世界を広げ、方法を身につけるには、専門科目だけでは十分ではないのです。例えば高等教育の先進国と見なされるアメリカの大学はまさにこうした教養教育（リベラル・アーツ）を基本にしています。その土台の上に大学院で、職業と密接に関わるような実用性の高い勉強を行うわけです。日本の大学の専門教育は、この教養教育の応用編といってもいいと思います。より個別的な対象と学問的方法に密接に依りながら、うえで述べたような方法的態度を身に付けるのが専門教育の目的だと言えるでしょう。

最後に少しわたしの専門分野に関わる話しをしたいと思います。わたしは政治学を専門としています。政治学は政治を対象とする学問です。最近は「政策科学」という分野も盛んになってきていますが、政治学は全体としていうと社会には直接には役に立たない学問でしょう。政治家になるために政治学を学ぶ必要があるという話はほとんど聞きません（わたしは学んだ方がいいと思いますが）。立教大学を最近定年で辞められた高畠通敏さんがお書きになった有名な政治学の教科書のまえがきに面白い話が載っています。就職活動をしていたゼミ生が会社の面接試験で「政治学は何の役に立つのかね」と聞かれ、答えに窮してしまったというのです。しどろもどろになってこのゼミ生は何か答えたそうですが、高畠さんはその答えを聞き「1年間

の私のゼミの指導が落第」であったと記しています。この問いへの答えは何か。続けて高畠さんはあるミステリー小説のストーリーを要約します。

舞台はナチスの残党と関係をもつ将軍が戒厳令下支配を行う独裁国。殺人事件が起き、その検死を担当したアメリカ人医師が事件の証人として冷徹な憲兵少佐テナントの尋問を受ける。医師は検死体が彼が主治医を5年間務めたブレーマンという男であり、右腕にナチスの強制収容所の捕虜であったことを示す数字の入墨があることを証言する。「あなたは、この男の過去をどの程度ご存知でした?」「5年間を死の収容所で過ごした男に過去を訊くようなまねはしない。お国にはまだそういう施設があるようだが…」。少佐は医師の当てこすりを意に介さず、犯人が捕まったことを告げる。「それなら簡単じゃないですか」。医師はそう言うが、少佐はこの犯人が全ヨーロッパが追っているヒトラー親衛隊の収容所部隊指揮官ヘルツィッヒ大佐であることがほぼ間違いないことを明かす。逮捕された犯人の手首には皮膚の移植痕がある。親衛隊はそこにS・Sの刺青を彫っている…少佐は医師と犯人を引き連れて将軍のもとへ行くことになる。「このアメリカ人医師は大佐を逮捕しえたと考え、大使館に通告するそうです」と少佐は報告する。将軍は愕然とし、大急ぎで大佐を逃亡させるよう指令し、暁方、大佐は他人名義の旅券で飛行機により脱出する。医師はそのときまでに真相を了解する。殺されたブレーマンこそが大佐であり、脱出した犯人がかつての収容所の捕虜であったこと、死体の刺青はゴマカシで犯人の皮膚移植は収容所の刺青を消すためのものであったこと、そして、すべては真相を知る唯一人の男テナントの工作であり、医師はその道化の役を勤めさせられたことを。テナント少佐はかつては将軍と戦った政府軍の憲兵隊長。だが、今でも職に踏み止まって社会犯罪を防ぐことに意味を見出している。

この「話の中に政治学の本質があるなどというつもりはない」と断っておられますが、高畠さんは、この話のなかには政治（学）にとって「重要なひとかけら」が含まれていると言っています。それは、「われわれをとりまく人間的環境を『状況』として全体的に把握し、そこから逃避するのではなく、これを『人間の条件』として受け容れながら、なおかつ、『状況』に対して『主体的』に働きかけようとする態度」だとしています。状況を受け容れつつ、それに主体的に働きかける術こそ政治であり、こうした営みを追いかける学問が政治学なのだとも言えるでしょう。したがって政治学は、「本質的に人間の「知性」のための学という性質を備えて」おり、「そのかぎりで、直接的な「実用価値」を本来もたないところに意味があるとした方がいい」のです。もう少しだけ高畠さんの言葉を引かせてもらいます。「政治学は全体として、いわば精神の『柔軟体操』なのであり思考の『道具を整備する』仕事なのである。ただし、『知性』ある人間が、長期的には、最大の『実用価値』をもつという抱負がそこに潜むのは、もちろんのことである」。

わたしはこのことはひとり政治学にのみ当てはまることだとは考えていません。大学で学ぶ学問とはそもそもそういう性格をもったものだというのがわたしの考えです。大学で身につける学問あるいは教養とはそういった意味での「知性」なのでしょう。最後に手前味噌ですが、昨年のわたしのゼミ生も就職面接で同じような質問を受けたそうですが、立派に受け答えしたようです。どう答えたかですって?それは秘密にしておきましょう。皆さん自身の答えを4年のあいだに見つけて下さい。

混乱の未来を背負う皆さんへ

理学部　惣川　まりな

新入生の皆さん。在校生の皆さん。あなたたちは、なぜものを考えることを止めてしまったのですか？現在への不満と、将来への不安と、心の寂しさを痛いほど感じながら、なぜそこから目をそむけるのですか？一人一人が同じ状態を共有していることを知りながら、それを話し合えたら楽になれるだろうナと感じながら、なぜ互いの心の中に立ち入ることを禁じてしまったのですか？どうして傷つくことをそれほどまでに恐れて、恋人同士でさえもが表面的なつき合いでとどめようとするのですか？

もちろんこうした問題は、個人個人に限定する問題ではなく、社会現象としての側面が大きいことも事実です。あなたたちは、そうした時代に生まれ出てしまった子供たちなのです。しかし、そうは云っても、現実にあなたの人生を生きるのは、他でもないあなた自身です。社会が代わって生きてくれる訳ではありませんし、あなたの代わりに誰かが責任を負ってくれるわけでもありません。大学生になったあなたたちは、もう、どこから見ても大人なのです。

あなたたちが考えなくなった理由の一つは、あなたたちが大人になる過程で、誰も手本を見せてくれなかったことにあります。実は、今の日本では、大部分の大人も考えることを止めてしまっているのです。それはなぜか。理由はたくさんありますが、その一つは、社会が複雑になりすぎたことにあると思われます。国というものが巨大化し、社会における家庭や個人の役割が部分化し、その上で国と国とが経済的に複雑なからまりを持つようになりました。社会の中でほんの小さな役割しか持てない個人が、巨大な世界メカニズムの中で何が出来るというのでしょうか？不況という社会状況を前にして、解雇におびえる一個人に、何が出来るというのでしょうか？いたいけなはずの子供が、ナイフや銃で親や他人を殺す状況に対して、私にどのように責任をとれというのでしょうか？総理大臣や高級官僚や警察のトップが汚辱にまみれていることについて、やはり、この社会の一員である私にも責任があるのでしょうか？こうした多くの問題に悩むうちに、大部分の大人たちは考えることを止めてしまったのです。

それでは、あなたたちも、考えることを止めてしまった大人たちのように考えることを止めて、社会の崩壊と運命をともにするのですか？確かに大人たちの多くは、近い将来への予感に目をつぶったり、思考停止したり、無理に明るく考えたり、投げやりになったりして、その不安から逃れようとしています。しかし、大人たちは、もうその人生の大半を過ごしてしまった人たちです。自分たちが真面目に生活してきたあげくが、八方ふさがりのような結果になってしまって戸惑っているのです。一方、あなたたちは、まだほとんど自分なりの生活をしていません。しかも、崩壊は、決して急激な過程ではありません。複雑なものが崩壊しつくすためには、長い時間がかかります。大人たちは、その人生の後半を耐えて、死んでしまうことができます。しかし、あなたたちは、人生の大部分をその崩壊につき合わなければなりません。他人が壊した社会の崩壊を見届けるためだけの人生なんて、私には考えられません。

これからの人類がたどる道は、想像するだに恐ろしいものがあります。多すぎる地球上の人口を養うため

に、自然の能力以上に自然を働かせて、食料を作り出さねばなりません。バイオです。食品加工です。作り出した食料をすみずみの人間まで運ぶために防腐剤が必要になり、輸送のために石油や天然ガスを燃やさねばなりません。その結果がアトピーや大気汚染をもたらします。こうしたさまざまな人為のために、あなたたちも、もっと幼い子供たちも、アトピーや小児喘息や、高血圧などに体をむしばまれています。実は、崩壊は、もう始まっています。私が小学生だった頃のクラスメートには、鼻をたらした子やデキモノのある子や泥だらけの服を着た子は何人かいましたが、アトピーの子も小児喘息の子も一人もいませんでした。生活は今よりずっと不便であり不潔でしたが、子供たちは今よりずっと無邪気で元気でした。

あなたたちが近い将来に結婚して、生まれてきた子供たちを、あなたたちは、あなたたちの親よりも上手に守ってあげることができるでしょうか?この社会の混乱の犠牲になったあなたたちは、自分の子供を自分と同じ目に合わることに耐えられるでしょうか?被害をこうむったあなたたちであればこそ、自分の子供を守らずにはいられないはずです。では、どうすれば子供たちを守れるのか?自分たちを守れるのか?

答えは簡単には出ません。答えが分かっているのなら、それがあなたたちに適用されないはずはありません。誰も答えを知らないのです。世界中で、誰も本当には知らないのです。その答えは、あなたたち自身で探す以外にないのです。でも、どうやって?それも、やはり、あなたたちが探すのです。それ以外に方法はないのです。

何だか、話が息苦しくなってきましたね。話の方向を少し変えましょう。よく「むだ飯を食う」という云い方をします。働ける年齢まで成長した人間が働かずに家でブラブラしていることを云うのですが、転じて、

いつまでも学校に行き続けている人間を指します。つまり、あなたたち大学生も、むだ飯を食っているわけです。日本社会はいつの間にか、むだ飯を食うことが当たり前になっているのです。日本の文化状況は、それだけ進歩したということです。では、むだ飯を食うことの利点は何なのでしょうか?働かずにブラブラすることの、どこが勝れているのでしょうか?

「ピアノは3歳までに習い初めなければものにならない」とか「高校を卒業してから始めたんでは、一人前の板前になるには遅すぎる」などと云われます。人間の脳はさまざまに変化しながら発達するので、ある種のことに特化するために最適な時期をつぎつぎと経過します。それでは、それらの時期を全て過ぎてしまったら、人間の脳はそれ以上発達できないのかというと、そうではありません。私たちの脳は、それぞれの敏感な時期にそれぞれの事象を吸収して蓄積し、全てを吸収し終わった後は（もちろん、何をどれだけ吸収・蓄積するかは個人個人で違います）、それらの情報を総合的に利用して、さまざまな判断を下しながら実生活をおくります。人間は、二十歳を過ぎたのちは、長い時間をかけて脳の総合力をみがくのです。村の長（おさ）や仙人が、身体はよぼよぼになっても人々の信頼を受け続けられるのは、勝れた総合判断力（＝知恵）を身につけているからです。（それにしても、現在の私たちの長＝総理大臣や仙人＝大学教授たちが（実は恥ずかしながら私もその一人なのですが）、しばしばその知恵を間違った方向に発揮する姿は、何と浅ましいことでしょう。）

大学に入学し、あるいは在籍しているあなたたちは、今、知恵をつけるための入り口で、生活的な必要に中断されたり方向をねじ曲げられたりせずに、さまざまな知識や考え方を身につけることを求められています。こうして、より広く、より深い判断力をみがき、将来、困難な局面に遭遇したときに、人々に代わって知恵を出し、問題を解決することを社会から期待されているのです。単科大学より市大のような総合大学が

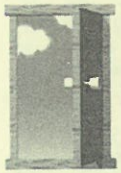
勝れている点は、むだ飯時代に、より広い選択の中から自分に向いた情報を選んで学べるところにあります。それだけでなく、その多様な勉強をアシストし、方向付けをして、能率良く学べるように手引きしてくれる多くの分野の先生たちがいます。大学におけるこのような勉学と、その結果にたいする社会的期待はいつの時代も同じですが、社会が、そして文明が混乱している今の時代は、いつにも増してその期待が大きいといえます。あなたたちがあなたたち自身で将来の問題を解決しなければならない、と私が冒頭で述べたのは、こういう意味です。

目先のことにとらわれやすい今の日本社会は、「余計なことは知らなくて良いから、即戦力になる専門家」を求める傾向が強いといえます。それに答えて大学生たちも、"役に立たない"大学の講義はほったらかして、専門学校に通う人さえいます。しかし、複雑な社会がおちこむこんぐらかった問題の解決には、どれほど多くの予備知識を持っていても多すぎることはありません。現にそれらを大勢が必死に持ち寄っても、アトピーや小児喘息は治せていないのです。しかも、どれほど多くの知識を持っていても、それだけでは何の役にもたちません。その知識をどこまで総合的に組み立てて、目前の問題に当てはめて、独自のアイディアに統合できるかが勝負です。問題が複雑であればあるほど、それが深刻であればあるほど、この作業には莫大なエネルギーと深い深い知恵が求められます。

経済が専門だからといって、医学や自然科学を知らなければ、将来の社会的動向を見通すことはできません。人間のおかれた社会状況や文化状況を知らずに、説得力ある小説を書くことはできません。正しい裁きもできません。人間や文化を考えずに推進する自然科学の研究や工業生産が、人間をも地球自体をも破壊してしまうことは、すでに経験済みです。アトピーや小児喘息の原因は何なのか?人間と人間を取りまく環境を最優先に置いて、その上で、皆が幸せに暮らして行くにはどうすればよいのか?防腐剤を使わずに、全ての人間に食料を届けるシステムはどうあるべきか?人間の持つ競争の特性を、互いに破壊し合うことにではなく、創造的に利用していくことはできないのか?世界の人口を、なるべく痛み少なく地球サイズに戻す方法はどのようなものなのか?目先の利益にとらわれず、子供たちの幸せを最優先においた社会は、どのようなものなのか?子供たちの創造的な能力を本当に引き出すためには、どのような教育をすれば良いのか?

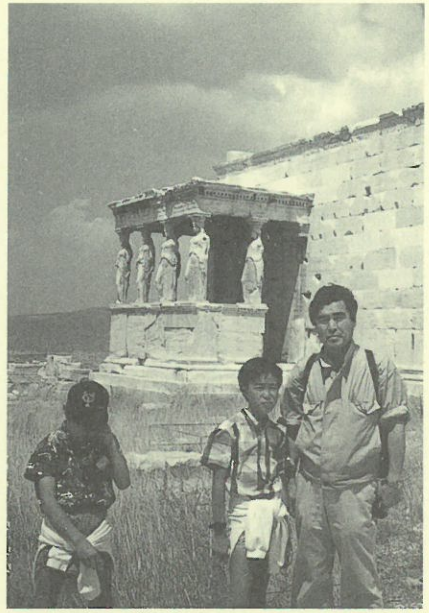
実は、問題解決の大部分は、問題の立て方にかかると云われます。あなたたち自身が虚心に状況を見つめ、虚心に問題を立て、それを互いに出し合い、協力してその解決に当たらなければ、状況が良くなる見通しはありません。そのためには、自分の専門分野だけでなく、さまざまな分野に触れてみて、自分のフィーリングにぴったり来る分野や、目からウロコを落としてくれる考え方を見つけ、その分野や考え方を取り入れて専門分野の勉強をふくらめ、自分の社会的立場を広い視野でとらえられるようになって下さい。むだ飯を食っている間に、何よりも、つねに物事を見つめ続ける目を養い、自分を成長させ続ける勉学心を獲得し、どのような状況をも虚心に受けとめる柔らかい頭の持ちようを見つけて下さい。虚心な心と柔らかい考え方を身につけて、あなたたちの子供たちを救って上げて下さい。

これが、残された時間を利用して自分なりの発信方法を見つけるために、後わずかで大学を辞めていく私からの、あなたたちへの遺言です。



フェスティナ・レンテ

文学部　丹下和彦



フェスティナ・レンテ　Festia lente! とはラテン語で、「ゆっくり急げ」という意味です。「急がば廻れ」だと言ったら分かりやすいでしょうか。ローマの歴史家スエトニウスの「皇帝アウグストゥス伝」を読みますと、初代ローマ皇帝アウグストゥス（63BC～14AD）がこれを戦陣訓としていたとあります。しかし私がこれを最初に知ったのは、恩師の恩師である田中秀央先生の著書、蔵書によってでした。そのいずれの本にも表紙の次の第一頁の下段にはこの言葉が書き付けてあったり、貼り付けてあったりしているのです。先生はこれをその恩師であるR、フォン・ケーベル博士から賜ったということです。ケーベル博士とは、明治中期に来日して日本にドイツ哲学とギリシア・ラテンの古典学を伝えたあのケーベル博士です（夏目漱石に清冽な小品「ケーベル先生」があることはご存じでしょうか）。この古い諺をいま皆さんに私の手からまたバトンタッチしたいと思います。平凡な言葉です。でも捉えようによっては含蓄があります。

いま皆さんは大学生活に満足しているでしょうか。充実した時間を過ごしているでしょうか。年寄りの思い出話は嫌みなものですが、少しだけ昔を振り返らせて下さい。といって、今から40年ほど前の、皆さんと同じ年頃だった私のキャンパスライフを思い返してみ

ても、格別豊かで充実していたとは言えません。その頃と今と、いちばん大きく違うのは、身の回りの情報量の多寡でしょう。私たちの時代はキャンパスの中だけが精神的宇宙空間でした。その中におればたいていのことは分かったのです。というよりはその中の情報で私たちの精神生活はほとんど成り立っていたのです。読書の傾向も、音楽の好みも、また観るべき絵画や映画の情報も、キャンパスの中だけでみな事足りたのです。狭いといえば狭い世界でした。ただ狭いながらも確かな知のネットワークともいうべきものがあったのでした。今は違います。キャンパスの中の情報の何倍もの情報がキャンパスの垣根の外にあふれています。しかもそれが垣根を越えて絶えず流れ込んできています。キャンパスの垣根の内外で情報の濃度差はほとんどありません。いや、外の方が濃いくらいです。情報のネットワークは往時に比べて格段の広がりをもっています。情報の量も種類もまたそのスピードも、格段に増大しているのです。それだけに今の若い人たちは、いや私たちも含めて、数ある中から有益な情報を適確に選別することの困難に直面しています。昔だっても私たちはしばしば情報に振り回されたものでしたが。

こうした情報過多の状況下にあって、しかし大学は相変わらず知的情報の一大発信基地たる位置を保持し続けようとしています。情報発信の多様性、多角化の中にあって、大学の地位は相対的に下落していることは確かですし、進学率の増加による大学大衆化が大学を従来とは異なる環境にしてしまっていることも事実です。しかしながら社会の中でのその存在意義、あるいは知的情報の収集と発信というその使命は、本質的には変わっていないと思います。皆さんが大学へ入ってまず学ぶのが全学共通科目です。以前には一般教養科目と呼ばれていました。リベラルアーツ liberal artsです。これは中世の自由七学科（文法、論理、修辞、算術、幾何、音楽、天文）に由来し、さらに淵源をたどれば古代ローマで自由市民liberi だけが修得を

許された学芸にまで遡ります。現在でもこのリベラルアーツを大学新入生にまず課すことは、意味のあることです。それは単に専門の学問へ向かう前の基礎学として、という意味だけではなく、専門の学問を担うにふさわしい人間としての基本姿勢を構築するものとして不可欠のものであるからです。英国ではリベラルアーツが狭義にはヒューマニティ humanityと呼ばれて、ラテン語ラテン文学を特に指すものであったことは、この間の事情を示すものでしょう。いわばそれは人間学なのです。実学的な技術は大学でなくても、すなわちこうしたリベラルアーツ抜きでも修得可能でしょう。しかし人間性の伴わない技術の一人歩きはしばしば危険を生むものです。最近起こった原子力関連の事故がよい例です。あれは単に管理能力のレベルの問題ではありません。もっと根本的な問題、技術の担い手である人間の、そのまた人間性の問題なのです。高度に文明の発達した現代、リベラルアーツがそのまますぐに実地に応用でき、かつ有効であるとは言えないかもしれません。しかしそうした実地に応用できる高度な専門科学を内部から支える基礎学としては、いまだ効力を失ってはいません。それは人間性を豊かにし高めるものとしてあるからです。本学で毎年開講されている共通教育の諸科目は、まさにそうした目的で提供されているのです。ものを学び始めると結果をすぐに求めるのが人間の常です。途中はなるべく省略して結果へと急ぎがちです。しかし過程を経なければ結果へ到達することは、実は不可能なのです。そしてその過程が複雑多岐であればあるほど、その結果は豊かなものとなるのではないでしょうか。決して直線的に急ぐ必要はないのです。冒頭にフェスティナ・レンテの語を掲げたのも、こうした意味からでした。

ところで私の専門は西洋古典学、すなわち古典古代のギリシア、ローマの文芸作品の研究です。いかにも古めかしい学問のように見えますが、そんなことはありません。ちょっと次を読んでみて下さい。

”命があり心があるものすべてのなかで、わたくしたち女こそ、いちばん惨めな生きものです。とにかくまずわたくしたちは大金を積んで夫を買い取らねばなりません。その上さらに身を粉にして仕えなければなりません。これがいっそう厄介なところなのです。そこで良いのに当たるか悪いのに当たるか、これが大問題となります。離縁なんて女には評判の悪いことですし、しかも女のほうから相手を拒むことはできません。何もかも初めての生活環境に入っていって、夫とうまくやってゆくにはどうしたらいいか、予め実家で教えられたわけでもないのですから、占い師でもなければわかるはずがありません。もしもわたくしたちがこれをきちんと務め、それを夫たちのほうも嫌がらずに受け入れて、一緒にやっていってくれさえすれば、その生涯はこの上ない幸せ。でも、そうでなければ死んだほうがましです。男は、家で奥さんと鼻つき合わせていて、もし嫌なことがあれば外へ行って憂さ晴らしをすることもできます、友だちや仲間のところを訪ねまわって。ところがわたくしたち女は、夫ひとりを頼りにしてゆかねばならないのです。“

これが今から2，400年余りも前に書かれたものだといえば、皆さん少しは驚くでしょうか。ついこのあいだ、私たちの身近かなところでこう嘆いていた女性がいたのではありませんか。これは、前431年にアテナイ（現アテネ）で上演されたギリシア悲劇、エウリピデスの「メデイア」の中の一節、女主人公メデイアのせりふなのです。薄幸を嘆くその人間性のありようは、2，400年前も今もまったく変わりません。古典を学ぶということは、なにも大昔のかび臭い文字をただなぞることではありません。いえ、古典作品にはただかび臭い文字だけが並んでいるのではありません。そこには現代の私たちと同じように生き生きと息づく人物たちが登場してきます。古典を読み学ぶことがそのまま現代を学ぶことに通じるのです。それは、古代も現代もそこに生息するのは同じ人間であり、その人間の営みを活写するのが古典であれ現代作品であれ文学作品にほかならないからです。時間を超

えて現代に通底する豊かな人間性を古典作品の中に認めること、すなわち古典を人間学として位置づけること、人間としての豊かさを身につけるための学問と位置づけること、これこそが古典を学ぶことの意義であろうと思います。

古典学はそれだけでも研究の対象になりますが、同時に万学の基礎学でもあります。なにしろ人間性涵養の学でもあるのですから。イタリア近世のルネサンス運動は人間性豊かな古典古代のギリシア・ローマの文芸、いわば人間学の見直しであったわけですが、その見直し作業は最新科学の発達した現代にこそもう一度心して行われなければなりますまい。ものを考える主体である人間が置き忘れられたところに進歩も幸福もあるはずがなかろうからです。古典を学ぶことは古いものに趣味的に埋没することを意味するものではありません。それはすぐれて現代を学ぶことであるのです。それはあらゆる学問の根幹でありまた最終目標でもある人間性を豊かにするということを教えてくれます。先端科学のそのまた先端だけを見ていては得られないものを与えてくれるのです。古典に帰るという一見迂遠な途がかえって究極の途を指示してくれるのです。まさにフェスティナ・レンテです。ただ私のような年寄りは、皆さんと違って、フェスティナ・ラピデ（急いで急げ）であるべきかもしれません。しかしむやみに急いだからとて実効のあるものでもありません。やはり私はレンテ（ゆっくり）でいこうと思います。でもそのせいか、いまだ古典学という基礎学の修業から抜け出せないでいます。リベラルアーツを卒業できないでいるのです。長期留年ですね。ただそれで多少なりとも人間性豊かな生活を送ることができていればよろしいのですが。

このような古典学を皆さんの修行時代の修業科目の一つに加えていただきたい―私はそう思っています。そして、Festina lente!

●●●●●筆者略歴●●●●●

野　田　昌　吾（のだ　しょうご）

1964年生れ
1993年　大阪市立大学大学院法学研究科後期博士課程単位取得退学
現在、法学部助教授
専攻分野／政治学、ドイツ現代政治史
担当講義／欧州政治外交史

惣　川　まりな（そうかわ　まりな）

1940年生れ
1969年　京都大学大学院理学研究科後期博士課程単位取得退学
現在、理学部教授
専攻分野／発生生物学、進化生物学
9月以降、執筆（専門＋一般）と農耕

丹　下　和　彦（だんげ　かずひこ）

1942年生れ
1968年　京都大学大学院文学研究科修士課程修了
現在、文学部教授
専攻分野／西洋古典学（ギリシア悲劇）
担当講義／ドイツ語、西洋古典学概論、西洋古典学演習

編集後記

この広報誌は、これまで全学共通教育に関する制度紹介や学生・教員の「声」および授業評価アンケート結果の概要紹介を中心に編集されてきました。

今回はガラリと趣を変え、総合教育科目の意義を理解していただける「エッセイ」集になっています。出来るだけ手軽にかつ「肩の凝らない」ようにと配慮したつもりです。読者の皆さんがこれによって「学ぶこと」のおもしろさを発見してくれれば幸いです。

もし、肩が凝ったようであれば、また何か感想があれば、下記にご一報下さい。なおその際、氏名の公表の可否を明記して下さい。

大阪市立大学公式ホームページ　大学教育検討委員会ホームページ
kentoi@mae. osaka-cu. ac. jp